

「あおり街かど探偵団」報告書

安田 道¹⁾

The report on “The detective agency at the corner of a street in Aomori”

Michiru YASUDA

Key Words : 旧棧橋、聖徳公園、青森公会堂、新棧橋、大町、米町、浜町、奥州街道、青森駅、連絡船可動橋

1. はじめに

かつて青森の街では大火が頻発した。特にちょうど 100 年前、明治 43 (1910) 年の大火は、市街地のほぼ全域を焼失するほど大規模だった。その後昭和 20 (1945) 年、東北最大規模ともいわれる青森大空襲により、再び市街地のほとんどを焼失した。これは他の都市、特に弘前などと大きく違う点である。弘前の街を歩くと、古い建物が多いことに驚かされる。一方青森は、せつかく残った古い建物も簡単に取り壊し、次々に新しい建物に建て替えてしまっている。たとえば戦災を免れた建物でも、昭和 50 年代に旧富士銀行、旧青森郵便局が、平成に入ってスポーツ会館 (旧青森公会堂) が取り壊されている。しかし丹念に探せば、煉瓦塀や縁石など気をつけなければ見過ごすようなものに、明治以来の歴史の重なりを読み取ることができる。

そこで郷土館では昨年 9 月、一般の方を対象に「あおり街かど探偵団」を結成。記念カンパジ (写真 1) を胸に付け、明治以来の歴史の重なりを探る街歩きツアーを実施した。当日は、青森県史編さんグループ近現代史担当の中園裕氏にも同行を依頼し、解説していただいた。ここではその内容を編集報告する。引用の画像は、青森県史編さんグループ、青森市史編さん室、青森空襲を記録する会、東奥日報社、山田ふぢゑ氏 (山田耕一郎夫人) の許諾を受けた。断りがないものは筆者撮影、筆者・郷土館所蔵品によるものである。なお本事業は、昨年度から実施している、アスパムとの連携展「あおり街の記憶」の関連事業として実施した。



写真 1 参加記念カンパジ

2. 日程・コース

(1) 第 1 回 9 月 13 日 (日) 10:00 ~ 12:00

① テーマ 「かつての中心街を歩く」

② コース 郷土館小ホール集合 (概略説明) ~ 郷土館大ホール (旧五十九銀行青森支店) 見学 ~ 旧青湾貯蓄銀行 ~ 武内製飴所 ~ つしま清香園 ~ 高橋かまぼこ店 ~ 旧最上商店 ~ 阿部製あん所 ~ 名畑商店 ~ 孔雀苑 (旧勸業銀行) 見学 ~ 旧青和銀行本店 ~ 善知鳥神社 ~ 青森銀行新町支店 ~ 青森県庁 ~ 青い森公園 (解散)

(2) 第 2 回 9 月 27 日 (日) 10:00 ~ 12:00

① テーマ 「交通と街並みの変遷を見る」

② コース 郷土館小ホール集合 (概略説明) ~ 本町 (旧浜町) カトリック教会 ~ しあわせプラザ (旧公会堂) ~ 青森製氷 ~ 割烹粋楽 ~ 旧聖徳公園跡 ~ 旧棧橋跡 ~ 聖徳公園 ~ 新棧橋跡 ~ 青い海公園 ~ ラブリッジ ~ 休憩所 ~ 青函連絡船可動橋 ~ 青森駅旧安方口 (解散)

3. 第 1 回コースの調査物件

(1) 県立郷土館大ホール (写真 2)

旧第五十九銀行青森支店として、昭和 6 (1931) 年竣工した。設計は、堀江佐吉の七男・堀江幸治が担当した。堀江佐吉は、弘前の旧第五十九銀行本店 (国重要文化財) や、五所川原市金木の斜陽館 (国重要文化財) 等多くの洋館を手掛けたことで知られている。その後、青森銀行本店を経て昭和 48 (1973) 年からは、青森県立郷土館大ホール (特別展示室) として、特別展・企画展展示会場と



写真 2 郷土館旧館の外観

1) 青森県立郷土館 研究主幹 (〒 030-0802 青森市本町二丁目 8-14)

なっている。吹き抜け構造を支える円柱上部から天井にかけて、見事な鍍絵（写真 3）が施され、階段の石材（蛇灰岩・大理石、写真 4）や手摺り下の透かし窓（「59」の数字を取り入れたデザイン、写真 5）、ブナ材の床面などに、当時の洋館風建築を感じ取ることができる。平成 16（2005）年には、国の登録有形文化財（建造物）に登録されている。



写真3 円柱上部鍍絵（こてえ）



写真4 階段柱



写真5 階段透かし窓

(2) 旧青湾貯蓄銀行（写真 6）

明治 33（1900）年開業したが、昭和 24（1949）年青森商業銀行と合併、さらに昭和 33（1958）年青和銀行（現みちのく銀行）と合併した。現在は、某生花店が倉庫として使っているという。



写真6 旧青湾貯蓄銀行



写真7 竹内製飴所



写真8 つしま清香園

(3) 武内製飴所（写真 7）

大町通りと旧税務署通り交差点北東角に、安政 5（1858）年創業以来、飴製造販売をこの地で行っている。現在のご主人は八代目で、152 年の歴史を誇る老舗の飴屋だ。建物は戦後のもの。

(4) つしま清香園（写真 8）

大正 7～8（1918～9）年からこの場所にある。現在のご主人は三代目で、創業 90 年程になるお茶屋さん。建物は戦後のもの。

(5) 高橋かまぼこ店（写真 9）

大町通りと横町の四つ角北西にある明治 36（1903）年創業の、現在青森で一番古くから続く老舗のかまぼこ屋さん。創業当初は、現在郷土館の東向かいにある、中小企業会館の場所にあった。建物は戦後のもの。



写真9 高橋かまぼこ店



写真10 旧最上商店



写真11 阿部製あん所

(6) 旧最上商店（海産物店、写真 10）

大町通りと旧浦町駅通り北西角にある。建物は昭和 23（1948）年頃にできたもの。昭和 40 年代までここで営業し、問屋町ができるのに合わせて移動した。

(7) 阿部製あん所（写真 11）

旧最上商店の対角にある。和菓子用の餡（こし餡・白餡など）をつくり、市内の菓子店甘精堂や二階堂に卸している他、一般の人にも小売している。昭和初期に創業し、現在のご主人は二代目で創業 80 年程になる。北側住居部分の建物は、戦後すぐ、当時大工の棟梁が自宅として建てたもので、秋田杉の柱目材と漆喰壁でつくられ

ている。南側工場部分には屋根の上に望楼風の窓が付いているが、これは蒸気抜きのための工夫。当時の食品加工工場によく見られたものという。戦前はこの場所に、文藝館という洋画専門映画館があった。

(8) 名畑商店 (文具・玩具・雑貨店、写真 12)

創業は明治末期、現在のご主人は三代目だが、20 年ほど前にほとんど商売をやめている。その頃まではオリジナルの絵葉書を販売していた。戦前は青森の市街地図も発行していた。現在の建物は、戦後すぐ建てられたもの。



写真 12 名畑商店

(9) 孔雀苑 (旧日本勸業銀行、写真 13)

大正 12 (1923) 年、青森県農工銀行が日本勸業銀行と合併し、日本勸業銀行青森支店となった。また青森支店に金庫を設置した渡辺設計事務所の HP によると、大正 14 (1925) 年設置となっているので、このあたりが竣工年と考えられる。戦災を免れた (写真 14) が、道路拡張により東側半分が削られ新町に移動、家具屋さんの倉庫を経て孔雀苑になった。現オーナーは、厚く堅い壁なので配線・配管は中を通せず不便だが、古き良きものを大事にしたいと話してくれた。店内にはバラの花模様のような鏝絵や、天井裏に吹き抜けの天井ドームが残っている (写真 15)。



写真 13 孔雀苑 (旧日本勸業銀行)



写真 14 『写真集青森大空襲の記録』より



写真 15 天井ドームが今も天井裏に残る

(10) 旧青和銀行

大正 11 (1922) 年開業の青森貯蓄銀行本店として、昭和 8 (1933) 年竣工した。昭和 23 (1948) 年商号変更で青和銀行本店となり、昭和 51 (1976) 年弘前相互銀行と合併し、みちのく銀行本町支店 (写真 16 ~ 18) となった。昨年 5 月までは (株)みちのくリースが使っていたが、みちのく銀行国道支店新築に伴い、同支店 (写真 19) 内に移動したため、現在は空き家となっている。なお新築された同国道支店のエントランスに、この建物外観の柱・貝レリーフが再現された (写真 21,22)。現存する昭和初期の数少ない建物として大変貴重な存在である。



写真 16 旧青和銀行本店外観



写真 17 外壁柱 (旧青和銀行)



写真 18 外壁貝レリーフ (旧青和銀行)



写真 19 みち銀国道支店外観



写真 20 柱 (みち銀国道支店)



写真 21 貝レリーフ (みち銀国道支店)

(11) 大嶋商店 (元・履物卸問屋、写真 22)

明治中頃から昭和 61 (1986) 年まで約 120 年間営業していた。建物は鉄筋コンクリート造りで昭和 25 (1950) 年に完成したもの。



写真22 大嶋商店



写真23 平井氏邸蔵



写真24 大橋仏壇店

(12) 平井氏邸蔵（元・雑穀飼料販売店、写真23）

雑穀飼料販売店は戦前でやめたが、100年以上続いた店だった。戦前隣の角地でビリヤード場も経営していた。隣の蔵も100年以上経っており、戦災でもほとんど焼けずに残った。

(13) 大橋仏壇店（写真24）

最初は家具の販売も行ってきたが、手狭になったこともあり仏壇のみの販売になった。この建物は昭和29（1954）年竣工のもので、現在は倉庫となっている。

(14) 善知鳥神社（写真25）

善知鳥神社は、青森市発祥の地ともいわれ、かつて県社とされた。また神社前に、「奥州街道終点の碑」（写真26）と、「青森市道路元標」（写真27）の石碑がある。つまり米町通りは、有力な神社の表参道であるばかりでなく、主要街道の終着地点でもあった。神社の参拝者のほか、長旅をしてきた人や買い物客も加わり、かつては多くの人出で賑わっていたはずであり、そのことが米町繁栄につながった。明治には、地名の元になった米屋の他、食品・醸造業、和洋雑貨・小間物店、呉服・洋服店等様々な商店が軒を連ねていた。神社は、明治43（1910）年の大火と昭和20（1945）年の戦災で焼失し、現在の本殿は昭和30（1955）年造営されたものである。



写真25 善知鳥神社入り口（東側）



写真26 奥州街道終点の碑



写真27 青森市道路元標

(15) 加賀氏邸

戦前、青森市長も勤めた方のお孫さんのお宅。大正初期に造られたといわれる、石造りの蔵と塀（写真28）が残っている。特に蔵には、青森では珍しい、鬼の面の鬼瓦が付けられている（写真29）。目と角は緑色で、金属製のような。石材は当時、秋田から運んできたという。



写真28 加賀氏邸（石造りの塀と蔵）



写真29 蔵の鬼瓦

(16) 新町通り

次の写真30（絵葉書）と図1は、ともに新町通りを、東から西（青森駅方向）を向いたもので、ほぼ同時期同地点である。道路左側ドーム状屋根の建物は、大正半ば～昭和初めは鳴海銀行。その後五十九銀行を経て、現在青森銀行新町支店。道路右側のドーム状建物は、1933（昭和8）年開業の青森デパートである。『青森市史 第五卷 産業編（下）』（1958）によると、当時珍しかった、エレベーター付の建物だったので、物珍しさから賑わったが、手狭だったことなどから2年も続かず廃業したという。図1は今純三の版画〔1934（昭和9）年、青森県画譜第6集〕だが、当時夜景の写真撮影は困難だったので、大変貴重な資料である。ドーム部分や、「キリンビール」・「ユニオンビール」の看板は、ネオンが輝いていたことが分かる。青森駅はこの頃、安方口から新町通りに面した南方に移転し、新町通りは青森一の繁華街となった。特に、県庁と新棧橋を結ぶ県庁通りとの交差点は、当時最高の場所だった。



写真30 新町通(奥が西、左に五十九銀行、右に青森デパート)



図1 青森市新町通夜景(今純三 作)

(17) 青森県庁

県史編さんグループ 主査 中園裕氏の『知られざる青森県』(『グラフ青森』連載中)によると、青森県庁は、弘前藩の御飯屋のあった場所に、御飯屋を改築して明治4(1871)年開庁。探偵団記念カンパジに使った写真(写真1)は、明治15(1882)年新築された2代目の建物が、明治41(1908)年大幅改修し、大正4(1915)年7月に撮影されたものである(写真31)。当時は、真北の新棧橋へ向かう県庁通りに面して北を向いていた。戦後、現在の北棟付近に西向きのバラックで3代目の建物が建てられたが、直後に火災で焼失し、当時隣接していた県立中央図書館書庫内の重要資料もすべて焼失した。次の建物は、現在と同じ場所に東向きに建てられた4代目で、現在の建物は、基本的に5代目になり、自動車交通時代を迎え、国道通り方向(南)に向いて建てられた[昭和36(1961)年]。

下の写真32・33は、いずれも5代目の建物で、提供は青森県史編さんグループである。両者の違いが分かるだろうか。5代目の建物は、当初東棟が5階建てだったが、その後手狭になり、屋上に一階付け加え6階建てとなり現在に至っている。そのため5階まで階段が連続するが、6階への階段は少し離れた場所にある。



写真31 『青森縣寫真帖』による



写真32 昭和40(1965)年8月



写真33 1975(昭和50)年6月

(18) 前田輪業(写真34)

夜店通りに戦後すぐ建てられたという、実に堂々とした木造建築の自転車店がある。店の南側には、今では懐かしいコンクリート製ごみ置き場の痕跡がある。前田店主が亡くなって、現店主が店を譲られた。今は自転車販売はやめ、修理のみ行っている。



写真34 前田輪業

4. 第2回コースの調査物件

(1) 浜町通り

かつての浜町は、大町・米町と並び中心街だった。詳細な理由は後述するが、浜町に棧橋があったことが大きい。海が荒れば船は欠航したので、浜町には回漕業・運輸業のほか、旅館・料理屋・商店も多く立地した。棧橋もなくなったためすっかり様変わりし、現在は住宅地にちかくなった。次の図2の中で現在も残るのは、「神病院」「梅津商店」「藤林源エ門」「小館さん」「浜町(現本町)カトリック教会」くらいになった。太宰治ゆかりの「玉屋」「今井たばこや」の名も見える。

浜町通り（大正末期～昭和初期）

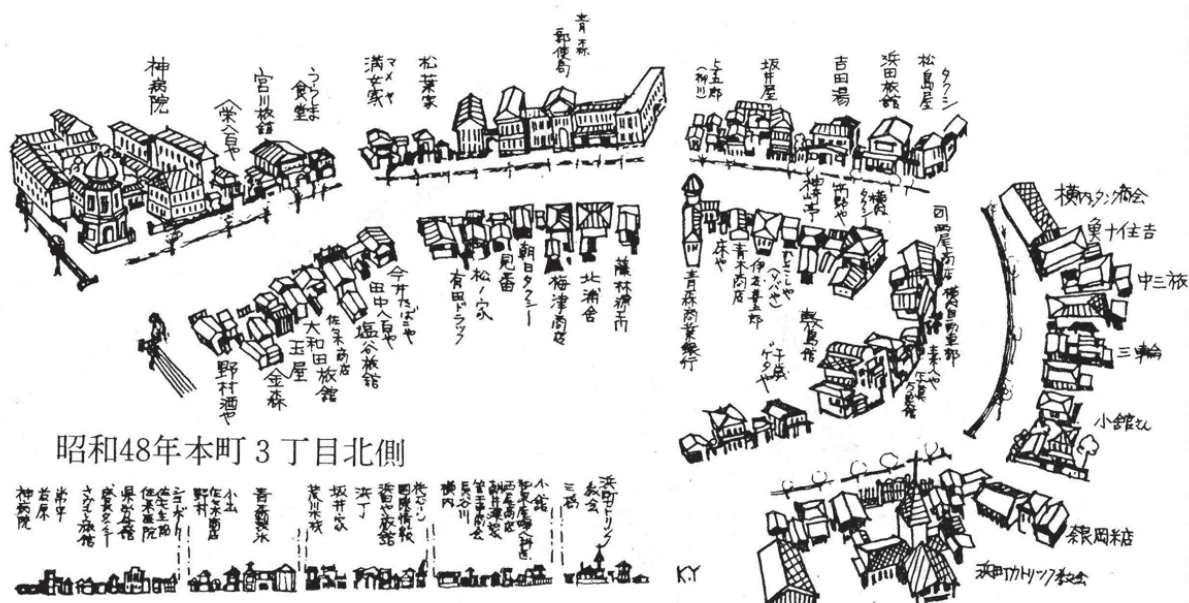


図2 浜町通り〔作画：山田耕一郎（『太宰治と青森のまち』北の会編 北の街社刊）による〕

(2) 野村氏邸（写真 35）

戦前は、神病院向かい（現ワシントンホテル駐車場）の角地で、酒店を営んでいた。弘前市桶屋町に、造酒屋を営む兄弟がおり、そこから仕入れた。建物は昭和 20 年代に建てられた、木造平屋建てのものだ。



写真 35 野村氏邸

(3) 本町カトリック教会

戦前は浜町カトリック教会といい、明治 30（1897）年にこの土地に設立した。昭和 20（1945）年の戦災のため、この当時の名残は、北側・西側の煉瓦塀（写真 36, 37）と、同じく煉瓦造りの教会学校（写真 38）に残るのみである。教会礼拝堂は、昭和 26（1951）年に復興したもの。



写真 36 西側の塀



写真 37 北から撮影、右側が教会学校



写真 38 教会学校

(4) しあわせプラザ（旧スポーツ会館、戦前の青森公会堂）

旧青森公会堂は、明治 33（1900）年、皇太子殿下（後の大正天皇）御結婚記念として、市民の寄付と市費によって建設された（写真 39）。その後、明治 41（1908）年に改築し、望楼風の塔が付加された（写真 40）。明治 43（1910）年の大火でも焼け残ったが、大正 14（1925）年に、鉄筋コンクリート製の建物になった（写真 41）。木造の建物は、橋本小学校裏に移築され、市立工芸学校（現県立青森工業高等学校）、市立青森実科高等女学校（現県立青森中央高等学校）、市立夜間中学校（現県立北斗高等学校）が使用したが、昭和 20（1941）年戦災で焼失した。この情報は、川原田満有氏が資料を探して提供してくれたものである。

一方、鉄筋コンクリートの公会堂は、戦災でも焼け残ったため、戦後進駐軍司令部が設置された。その後市スポーツ会館として使用されたが、老朽化と道路拡張を理由に建て替えられた（写真 42）。歴史的重要建築物として残すべきとの声もあったが、外観デザインを踏襲した新築の建物に建て替えられ、現在「しあわせプラザ」（青森市福祉増進センター）となっている（写真 39・40 の提供は青森県史編さんグループ）。この時古いものはすべてなくなったと思っていたが、歩道との縁石（写真 43）だけは古いものと中園氏に教えられた。これは、大正 14（1925）年竣工の 2 代目鉄筋コンクリート時代のもの（写真 41）。両者を見比べると納得できる。



写真39 明治33 (1900) 年竣工当時



写真40 明治41 (1908) 年改築



写真41 大正14 (1925) 年新築



写真42 現在の「しあわせプラザ」



写真43 現在の歩道との縁石

(5) 青森製氷 (写真44～46)

大正9 (1920) 年10月20日に氷の生産を始めた。それ以前は、函館から運ぶ天然氷を氷室に保管して使うほかなかった。そのため魚屋・漁業関係者が出資して設立した。現在は魚の水揚げも減り、需要が少なくなったため、年平均の稼働率は30～35%程度で、余った氷は貯蔵し工場を休ませている。かつて工場は2棟並んであった (写真44) が、現在は西側の1棟が残っている。氷は48時間かけ透明な角氷 (1個135kg) が作られている。工場の石材は野内産凝灰岩で、すき間なく積み上げられている。



写真44 昭和初期の絵葉書



写真45 2004年の青森製氷 (HPから)



写真46 現在の青森製氷

(6) 割烹粹楽 (写真47)

昭和8 (1933) 年創業。現在の建物は、昭和23 (1948) 年頃にできたもの。かつて繁華街だった大町・米町・浜町は、棧橋が西方へ移動後、夜の街、料亭・飲み屋街に変わり芸妓さんも大勢いた。やがて、漁港・魚市場も移動し、アスパム・青い海公園になったため、昭和初期から続くような老舗の料亭は、この粹楽くらいになってしまった。



写真47 割烹粹楽

(7) 聖徳公園

明治9 (1876) 年7月16日、明治天皇東北巡幸の後、青森港旧棧橋を出港、函館を経由し、4日後の7月20日に横浜港に着いた。これを記念して、昭和16 (1941) 年「海の記念日」が制定され、平成8 (1996) 年には、国民の祝日「海の日」に格上げされた。そして青森では、旧棧橋 (浜町棧橋) たもと西側に、昭和5 (1930) 年「聖徳公園」が造られ (写真48)、「景仰聖徳」の碑 (写真52) を設置した。当時の様子は、今純三の「聖徳公園」[1934 (昭和9) 年、青森県画譜第7集、(図3)] に詳細に描かれている。そのなごりは、当時の海岸との縁石 (写真49) にかろうじて残っている。

ところで公園の名称だが、碑文の意味である「天子の徳を称える」からすると、「せいとく」の読みが正しいようだ。事実、戦前の新聞記事には「せいとくこうえん」と仮名がふられていた。しかし、聖徳太子の知名度が高かったためか「しょうとくこうえん」という呼び名の方が、市民の間に定着し、現在では「しょうとくこうえん」と仮名をふるもの多い。

次にその場所だが、現在の中央埠頭付け根付近に移動するまで、幾度も移動させられてきた。その経緯を、青木孝松・編集（1997）『海の日由来と聖徳公園』にもとづき、写真 53 にまとめてみた。最初の移動は次の通りだ。戦後すぐ、公園があった新浜町通りに面した角地に海事会館が建設され、「景仰聖徳」の碑は、その北側狭隘地に移動された（写真 53 中②）。この理由は、戦後公園近くの青森公会堂に占領軍司令部が置かれ、それに対する遠慮から、天皇にゆかりが深い公園、特に「景仰聖徳」の碑を隠そうとしたのだろう。次の移動は昭和 43（1968）年である。この地に貨物引き込み線（「青森県公用臨港線」）を建設することになり、東向いの角地（旧税関跡）に移転（写真 50, 写真 53 中③）。平成 2（1990）年、「海の記念日」50 回を記念し、北側に拡張（写真 53 中④）。さらに、平成 8（1996）年、ベイブリッジ建設に伴い、新浜町通りを海手側に 2 車線分拡張。現在の中央埠頭付け根西側に移転させられた（写真 51, 写真 53 中⑤）。このように公園は、時代の移り変わりとともに頻繁に移動してきた。そもそも、天皇御巡幸を記念する碑と公園として残すのなら、その場所は旧棧橋付近にすべきである。



写真 48 最初にあった場所



写真 49 最初の公園の海との縁石

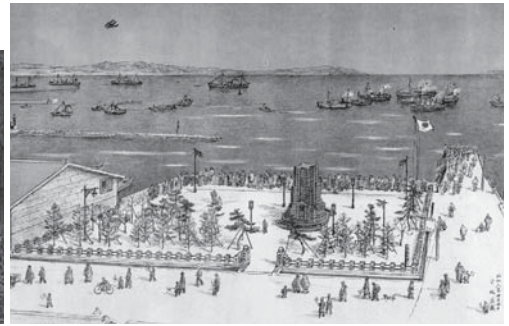


図3 聖徳公演（今純三 作）



写真 50 3度目の場所



写真 51 現在の聖徳公園



写真 52 「敬仰聖徳」の碑



写真 53 昭和 23（1948）年の航空写真に聖徳公園の位置を記入した

(8) 青函連絡船可動橋 (写真 54 ~ 56)

青森の街は明治 24 (1891) 年、日本鉄道開通で上野と結ばれ、大きな転機を迎えた。それは青森が、首都東京と、開拓地北海道を結ぶ物流の大動脈における中継地となったためである。しかも青森は、陸上交通と海上交通の結節点だったため、そこで人と物が、列車と船を相互に移動する場所になった。乗り換えには一定の時間を要するため、運輸業・宿泊業・飲食業が発達した。また、北海道で自給できない生活必需品、とりわけ食料品・衣料品を供給するため、食品加工販売業・衣料品販売業が、さらに金融業が米町・大町を中心に急速に発達した。

函館との定期船は、鉄道が来る前の明治 6 (1873) 年に始まった〔明治 41 (1908) 年以降「青函連絡船」となる〕。当時の船は、旧棧橋 (浜町棧橋) 沖に停泊し、本船までははしけが使われた。当然天候の影響は大きく、荒天による足止めも多かったという。おかげで浜町界限は、輸送業ばかりでなく、宿泊・飲食業で大いに繁盛した。

ところが、青森を通過する者にとっては不便極まりなかったので、函館への定期船棧橋は、明治 31 (1898) 年に青森駅隣接地に移動した。また、青森駅も駅構内拡張のため明治 39 (1906) 年、安方口から新町口に移転した。こうしてしだいに旅行者は、米町・大町・浜町には行かなくなり、代わって新町が賑わうようになった。

やがて昭和 63 (1988) 年、青函トンネル開通により青函連絡船が廃止になると、北海道への旅行者にとって青森駅は、通過駅の一つにすぎなくなった。そのため新町も徐々に賑わいを失いつつある。

このように旧棧橋・青函連絡船・八甲田丸と可動橋、そして新幹線ができるまで日本一の長さといわれたプラットホーム (364m) は、そうした意味で、青森の街にとって大変重要な遺跡といえる。これをどう生かすかが青森にとって重要である。



写真 54 現在の第二岸可動橋付近



写真 55 第二岸可動橋プレート
(昭和 27 年 8 月)



写真 56 ホームと連絡船との連絡通路



写真 57 『目で見る青森の歴史』より



写真 58 絵葉書による



写真 59 『写真青森県百年史』
(東奥日報社) より

(9) 青森駅

明治 24 (1891) 年 9 月 1 日、日本鉄道が開通した。当時の青森駅は、現在の^{新町口}より一本海手の安方口にあり、現在の駐輪場・送迎用駐車場付近にあった (初代、写真 57)。明治 39 (1906) 年、駅拡張等の理由により、現在の^{新町口}に移動・改築した〔大正 13 (1924) 年改築、写真 58〕。『目で見る青森の歴史』によると、この時、正面出入口と乗降口を新しく設け、2 階建ての連絡待合所を増築したのだという。3 代目は、昭和 11 (1936) 年～昭和 34 (1959) 年 (写真 59)。4 代目が現在の建物で、昭和 34 (1959) 年 12 月 25 日竣工。3 代目は戦災を免れだけに、何らかの形で残してもらいたかった。

青森駅が^{新町口}に移転し、青函連絡船に駅ホームから直接乗れるようになった。貨車航送も可動橋設置で可能になった。こうして繁華街は徐々に移動し、かつての繁華街は変貌した。つまり、浜町・大町・米町から徐々に銀行・商店・映画館が無くなり、夜の街になった。代わって新町が賑わうようになったのである。

ちなみに青森市街地には、他に浦町駅が明治 26 (1893) 年、現在の旧線路通り北側に開業、大正 15 (1926) 年南方移転し、昭和 43 (1968) 年 7 月 22 日廃止。浪打駅は大正 13 (1924) 年開業、浦町駅と同時に廃止。両駅の代わりに東青森駅が、両駅廃止前日に開業している。浦町駅から北上する、現在の平和公園通りは、当時浦町駅通りと呼ばれ、国道通り交差点付近に銀行・病院等が発達するきっかけになった。

(10) 奈良岡末造米穀

戦前（建設年不詳）からの倉庫の中に、さらに古い 100 年以上前の倉庫（写真 60）がある。戦災も免れたが、中の米は焦げ臭くて売り物にならなくなった。そこで無料で放出したところ感謝されたという。また隣には、住居（写真 61）がある。建築は戦後すぐというが、実に堂々とした木造建築である。



写真60 倉庫内の蔵



写真61 住居

5. おわりに

探偵団を終えて考えたことをまとめてみる。第 1 回はかつての中心街を歩いたが、ここは大きく変貌していた。日曜の日中のせいか歩く人はなく、駐車場が目立った。しかし、高橋かまぼこ店のように頑張っている老舗も見られた。こうした店を食べ歩きツアーの観光資源として活用すべきと考えた。

第 2 回は、「交通と街並みの変遷を見る」というテーマで歩いた。ベイブリッジ高架橋の下、かつての連絡船可動橋付近は、栈橋と船による水上交通の時代から、鉄道交通の時代になり、両者を結びつけた連絡船貨車航送システムができた。さらにそれらの上に、覆い被さるようにベイブリッジが横断する場所になった。そうした交通機関の変遷を、自分の目で実感できる場所であると、中園氏が解説してくれた。実際その場に立つて、まさにそうした最高のロケーションであると納得した。これもまた青森を理解する上で重要な場所であり、観光資源として生かすべきである。

この 1 年半の間、青森の街の成り立ちについて、あちこち歩きながら様々な方から昔の話を伺った。今回は、一般の方々をお連れし、古い建物を紹介しながら歩いた。これまで青森の古い建物は、戦災によってほとんどなくなったと思ってきた。しかし正確にはなくしてきたのだ。青森の人は、大火や戦災で多くを失ったためか、古い建て物の貴重さに気づく人が少なく、使い勝手が悪くなると、次々に建て替えてきたのだ。あたかも古い道具を捨て、新しい道具に買い換えるような感覚だったと思われる。しかしそれでよいのだろうか。過去を誇ることができない者は、未来を夢見することもできない。そして故郷に愛着をもつこともなくなるだろう。「貧すれば鈍する」といえば言い過ぎだろうが、そのようなことさえ感じられる。それでも今回紹介した古い建物に暮らす方々は、古いものの価値を理解し、不便だけれど使い続けたいと考える方々だった。彼らから心の豊かさやゆとりを感じることができ、嬉しくなった。

6. 謝辞

最後に、県史編纂グループ主査中園裕氏をはじめ、飛び入りで連絡船や可動橋の説明をしてくれた、元青函連絡船船長・北山榮雄氏、資料を提供してくれた川原田満有氏、見学を快諾してくれた孔雀苑の木下則英氏をはじめ、聞き取りに快く応じてくださった大勢の街の方々、探偵団の一員として参加してくれた方々、他にもたくさんの方々にご協力いただいた。御陰様で 2 回の探偵団を無事終了できたことを深く感謝申し上げます。来年度もさらに充実させた探偵団を計画しているので、ご協力いただけるよう重ねてお願い申し上げます。

引用・参考文献

- 青森県史編さん近現代部会・編集（2005）『青森県史 資料編 近現代 4 昭和恐慌から「北の要塞」へ』、青森県。
- 青森市史編纂室（1958）『青森市史 第五巻 産業編（下）』、青森市。
- 青森市史編纂室（1969）『目で見る青森の歴史』、青森市役所。
- 青森市史編さん委員会（1989）、『青森市の歴史』、青森市。
- 青森空襲を記録する会・編（1995）『写真集 青森大空襲の記録 次世代への証言』、北の街社。
- 青森駅開業百周年記念（1991）『青森駅百年史』、J R 東日本株式会社 青森駅。
- 北の会・編（1988）『太宰治と青森のまち』、北の街社。
- 東奥日報社編集局（1968）『写真 青森県百年史』、東奥日報社。
- 青木孝松・編集（1997）『海の日由来と聖徳公園』、青森港湾研究協会。
- 小野忠亮（1982）『青森県とカトリック 宣教百年史』、百年史出版委員会。
- 肴倉弥八（1980）『ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和 青森』、国書刊行会。
- 肴倉弥八（1976）『青森市町内盛衰記』、歴史図書社。
- 瀧本壽史・監修（2007）『図説青森・東津軽の歴史』、郷土出版社。
- 中園裕（2006）『「青函圏」の中の青森市』（『知られざる青森県』第 14 号）、『グラフ青森 2 月号』、グラフ青森。
- 中園裕（2009）「歴代県庁のプロフィール」（『知られざる青森県』第 49 号）、『グラフ青森 1 月号』、グラフ青森。
- 中園裕（2009）「県庁のお色直し」（『知られざる青森県』第 55 号）、『グラフ青森 7 月号』、グラフ青森。